

「俺のさしの話」

ある所に、一人の若い女の人がありました。

女の方は弱虫で臆病者でしたが、とても素晴らしい「俺のさし」を持っていました。そのものさしは計るものによって目盛の幅がコロコロ変わる不思議なものさしで、どんなものでも好きなように計れるのでした。だから本当には何一つ正確に計ることはできなかつたのです。

しかし、奇妙なことに、女の方は目盛の幅が計るものによって変わっているなんて、まったく気付いていなかったのです。そのため、女の方はそのものさしを絶対に間違いのない、この世で一番正しいものさしだと信じ込み、何よりも大切にしていました。

女の方は毎日得意になって、自分の目の前に現れるすべてのものを、このものさしで計りました。食べ物、着る物、家、木や草や花、お日様、雲、風の音……でも、このものさしが一番役立ったのは人を計る時でした。顔の表情、手足の長さ、髪の色から目の光、声の高低に至るまで、どんなところでも実に細かく計ることができました。

そして、その結果で、この人は、自分にとって都合のよい人か、よくない人かを決めることもできました。その上、人と人とを比較して、善い人と悪い人、奇麗な人と醜い人、賢い人と愚かな人、強い人と弱い人等、ずいぶんいろいろな分け方もできたのです。

この便利なものさしは、女の方に大きな自信を持たせてくれました。だって、このものさしを持っている限り、たとえどのような難しい問題や困難な出来事にぶつかっても、うまく解決できると信じていることができたからです。そのために女の方は、だんだん自分が弱虫で臆病者だったことを忘れてゆきました。そしていつの間にか、自分はとても強くて賢い人間、この世で一番偉い人間だとまで思い込んでしまったのです。

さて、女の方はやがて優しい男の人とめぐり会い結婚しました。そして二人の可愛らしい子供が生まれたのです。子供は、上が男の子で、下が女の子でした。女の方はとても喜んで、それは大切に育てました。

「こんなに強くて賢い母親から生まれた子供達ですもの、どんなにか立派な人になるのだろう」そう思うと、女の方はワクワクするのです。ところが何年かが過ぎ去り、子供達が大きくなるにしたがって、大変困ったことがおこりました。男の子は元気が良いけれどすごいいたずらっ子で、一日中、村の中を走り回っていたずらばかりして歩くのでした。おまけに学校へ行っても勉強なんか少しもしないで遊んでばかり、女の方の言うことなんて聞こうともしません。そして女の子といえば、生まれつき身体が弱くて、とうとう二度と歩くことも、しゃべることもできないだろうと言われるほど、ひどい病気になるってしまったのです。

女の方はあわてました。こんなはずではなかったと、子供達を計ってみるのですが、何度計り直してもものさしの目盛は、どうしようもない悪い子、弱い子、愚かな子だと答えるばかりです。女の方は泣きました。人として生きる価値もないような子供達を持った自分が余りにもみじめで、毎日泣いて暮らしました。そして、どうとう生きてゆく自信も希望もなくなってしまったのです。

ところが、そんなある日のことです。いつものように一日中、外を駆け回って元気に遊んで帰った男の子が、小さな妹を抱きしめて優しく頬ずりしながら「ただいま、ユキちゃん」と言うと、無邪気に笑う妹をしげしげと見つめながら、女の方にこう言いました。「お母さん、ユキちゃんは綺麗だね。顔も、手も、足も、お腹だって全部綺麗だよ、ユキちゃんはお家のみんなの宝物だもんね。」男の子の言葉は、まるで電流のように女の方の身体へ流れ込みました。「本当に、そうだねえ…」そう答えながら、女の方は身のちぢむほどの恥ずかしい思いに襲われて、思わず二人を強く抱きしめました。

その時、女の方にははっきりと分かったのです。自分が今日まで大切にしていたものさしが、実は、自分勝手な思いだけで作られた間違いだらけの「ものさし」であったことが、そして、そのものさしだけを正しいと信じていた自分は、この世で最も傲慢で愚かな人間だったのです。

二つの尊い宝物を、両腕にしっかりと抱きかかえた女の方は、夕日がキラキラと輝く窓辺に近寄りました。こんなにも静かで優しい景色を、今まで見たことがないと女の方は思うのでした。

風がカーテンを揺らしながら、涙で濡れた頬をソツとなで過ぎた時、どこからともなく透き通った風のささやきが聞こえてきました。「私は私、あなたはあなた、ホラ、こんなに素敵に生きている、嬉しいね…」